

チェンマイ蝶採集記

細見 彬文*

1. 思いつき

毎日の仕事と研究に疲れはてて、私は一度思いきり羽をのばしたくなった。それで思いついたのが高校生当時、勉強そっちのけで蝶を追って遊んでいた時のことである。そこで蝶を採集しに出かけることにした。1988年12月から1989年1月にかけて約20日間である。だが冬の最中に日本で蝶を採ることは不可能である。そこでどこがいいかと思案した結果、タイのチェンマイに出かけて行くことにした。チェンマイに決めたのは、月刊『むし』No. 105(1979)にかなり詳しく採集地案内が出ていたためである。

蝶採集の用意は甲虫用の桐箱3つ、展示板を大小合わせて10枚、その他を用意した。桐箱は衝撃をさけるためウレタンフォームで包んで大型ポストンバッグに入れた。

2. 人脈

チュラロンコン大学のSomsak Panha (ソムサク・パナ)氏が3年前から昨年末まで京都大学の日高教室(生態学)へ留学していたので、彼とは大学や学会で何回も顔を合わせてよく話し合っていた。彼はカタツムリの生態の研究が専門で日本貝類会誌にも何度か投稿していた。そんなわけで私はバンコックに着くとすぐ、チュラロンコン大学のバナ氏を訪ねた。バナ氏は、猿の生態の研究者であるCharal Eakavibhata (チャラン・エカビパータ)氏とともに私をバンコック特有のレストランに招待してくれた。2人は、チェンマイに行くならと言ってチェンマイ大学生物学教室のBoonkate Fongkaew (ブンケー・フォンケオ)氏に紹介状を書いてくれた。そのおかげで私はチェンマイではなに不自由なく行動できるようになった。

田舎大学であろうと思いつきながら、チェンマイ大学を訪ねたが、なかなかどうして、12学部をかかえる立派な総合大学であった。チェンマイ大学は25年の歴史しかない新しい大学であるが、4棟の構内にはそれぞれの建物があり、学部と学部は300mも離れており、その間には多くの植物が植えられていたり、自然がそのまま残されていたりする。日本では比較すべき大学がないが、強いていえば北海道大学に似ている。ここは、生物学科も他の学科もマスターコースまでしかないで、博士になろう

と思う人は外国の大学へ出ていく。タイの国立大学は全部合わせて15大学あり、入学しようと思うと大学入試一般試験というのを受けなければならない。合格率は10%で、10人に1人しか合格できないきびしいものである。一般試験に合格するとどの大学へでも入学できるので、タイには日本のように大学間の差というものがない。

Dr. ブンケーに会って私は助手をしてくれるアルバイトの大学院生を紹介してくれること、ホテルのフロントデスクは英語がほとんど通じない女性ばかりなので英語の通じる安いホテルを紹介してくれることを頼んだ。助手になってくれる人物には1日300 バーツ (1500円)を支払うと言ったら、彼は200 バーツで十分だと言う。翌日、彼は2人の大学院生を連れてやって来て、希望者が2人いるから2人とも使ってやってくれと言う。2人とも修士コースの1年生だった。1人はMr. Surasa、もう1人はMr. Somyot と言った。どちらも見事な英語が話せたので私は信用した。私はこの2人の大学院生に事実上、全てを助けてもらうことになった。自動車のチャーターの交渉、現地の人達との通訳、案内、蝶の採集手助けから展翅までみな彼らが引き受けてやってくれたので大助かりだった。

3. チェンマイ事情

チェンマイのホテルはデラックス級から二流、三流まですべてそろっていて数もはなはだ多い。デラックスなホテルは1泊5000円から1万円、二流は1500円から2000円、三流は500円程度で宿泊できる。私はブンケー教授の従兄が支配人をやっている関係で、ターペーゲイトのすぐ内側にあるMontri Hotel (モントリーホテル)にホテルを変えた。このホテルは1泊350バーツ (1750円)で中流だったが、日本なら2万円程度は必要な立派なホテルで、従業員は皆、上手な英語を話すので助かった。チェンマイ市内の他の中流ホテルは従業員が英語を話せないところが多く、もちろん日本語は通じないので、チェンマイならモントリーホテルを薦める。レストランも総ガラス張りで清潔で、かなりの品数の料理を注文しても100バーツ (500円)と安いので、食事は1日1000円で十分である。旅行になれているからといって三流ホテルに泊まるのはよくない。レストランその他の衛生状態が悪く病気になる可能性がある。それに物がなくなることもあるという。

*育英高等学校

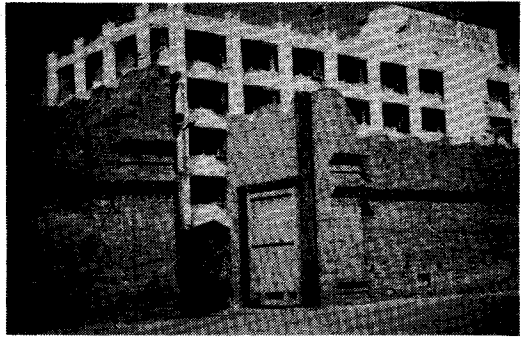
市内には日本人経営の武蔵（ムサン）という日本レストランがあり、御主人が丸山喜一といって神戸市北区の出身者である。一度訪ねてみるとよい。すし、さしみ、天ぷら、味噌汁など一応日本食はそろっている。それよりも大切なのは御主人からチェンマイの裏の事情を聞くことができる。いかにチェンマイで失敗した日本人が多いか、どんなことで失敗したかを聞くことができる。これを教訓として失敗（多くは大金を失ったり、犯罪に巻き込まれたり）することがないようにすることができる。

タイには正確な地図というものがない。本当はあるのだろうが、軍の機密になっていて書店では売っていない。手に入るのはごく荒い、150万分の1程度の地図である。だから、山道を地図をたよりに歩くことはできない。ごく荒い地図でも滝のあるところや、象のいるところ、国立公園などの名所は記入してある。蝶は谷川ぞいや、滝のあるところに多いので、タイの観光名所になっている滝のある場所に眼をつけて出かけるとよい。そうした場所には必ず小さな土産物屋や駐車場があるので、そこに車を止めておいて2～3時間採集するとよい。

チェンマイにはタクシーがない。あるのは小型トラックを改造して屋根と椅子をとりつけたミニバスとサムロ又はトクトクと呼ばれる三輪自動車、そしてツーリスト会社に頼めばチャーターできるバン型の自動車である。サムロは市内交通には便利だが、山へ行くには使わない方がよい。横転する危険がある。中流以上のホテルの前にはミニバスが客待ちしているから、行き先を告げ、値段交渉をする。例えばチェンマイ市からマエサの象訓練場まで40kmをミニバスをチャーターすると、往復で、しかも行った先で3時間も待たせてくれて350バーツ（1750円）と安い。ドイ・ステップ山なら150バーツ（750円）である。サムロは絶えず市内を流して走っているのだから、「ヘーイ、トクトク」と声をかけると止まってくれる。これもかならず行き先を告げ値段を交渉してから乗るようにする。市内なら近いところで20バーツ（100円）から遠い所で40バーツである。

4. 現地採集のこつ

山岳地帯の採集に行くために絶対忘れてはならないものは水と食糧である。リゾート地域には小さな売店やレストランもあるが、衛生状態がよくない。そこで水はホテルのレストランでPolaris という名で売っているプラスチックビンに入ったものを10バーツで買う。弁当はBox Lunchを作ってもらえばよい。しかし、もっとよい方法は日本からカロリーメイトを持って行くことである。カロリーメイトは400kcal あるので、昼食には1箱で十分である。美味ではないが、カロリーとビタミンが



ターペーゲイト（城門）。うしろはモントリーホテル

きっちりと取れて衛生的である。

蝶を採集して一番困るのが乾燥である。三角紙に包んだまま日本に持ち帰り、再び湿気を与えてやわらかくして展翅するという方法もあるが、それをやると一度乾燥したものが完全に生の状態にもどるということではなく、羽がとれる失敗をよくやる。それで現地で標本にして日本へ持ち帰るのが最もよい。しかし展翅板に展翅した蝶は3日も4日も生き続けているものもいて、なかなか乾燥して固くなってくれない。そうすると次の採集に出かけることができなくなる。そのため私は現地でひと工夫した。乾燥器を作ったのである。現地の一番大きな市場へ行って食糧品店を探し、食品をつめていたブリキカンを買った。今度は電気屋へ行って100Wの電球とソケット、電線などを買い、100Wの電球をブリキカンの側面にとりつけた。ふたをしめれば内部は80℃位の温度になる。タイの電球ソケットは日本のものとは違い、カンに固定することができるようになっているので便利である。この乾燥器に展翅した蝶を入れれば2時間で完全な標本となる。火事をおこす心配がないかどうか、かなり慎重に確かめたが、外部は70℃以上にならないので、ホテルの室内の板の上だと大丈夫である。もし室内がカーペットだったら、木の板を下に敷くことが望まれる。ブリキカンに孔を開けるのは電気屋に頼んでドリルで孔を開けてもらうのがよい。乾燥が容易になれば、毎日どこかへ採集に行くことができるようになる。なお、タイの電圧は220Vなので、日本で乾燥器を作って持って行っても変圧器がないと使えないものになってしまうので、現地で作ることである。

タイ北部の蝶は、一般に褐色系の種類が多く模様も地味なものが多い。だから飛んでいる蝶を見るとどれも同じ種類に見える。しかし、実際に採集してみると別種であることが多く、種の数は極めて多い。だから見かけた蝶はすべて採集した方がよい。そうすると、またたく間に20種から30種の蝶を採集することができる。タイ北部で白い蝶を見かけたならそれは大変な珍種であることが

多い。白い蝶を見たら絶対に取り逃がさない覚悟で、精神を集中して網をふる必要がある。私はそうして多くの珍種を得た。

5. 採集地案内

(1) チェンマイ大学構内

ドイ・ステップ山のふもとに広がるチェンマイ大学構内は樹木と花でうずもれており、構内には湖もあり、この湖のまわりの緑地帯が好採集地である。マグラチョウ類、シジミチョウ類、ミスジチョウ類が多い。構内の採集は自由であるが、校門にはガードマンが立っており、車の入構をチェックする遮断機が降りているので、蝶を採りたいと言えば入構を許してもらえ。しかし、構内は迷路のようになっているので、中に入ると出口がわからなくなって迷ってしまうことが多いから注意すること。

(2) チェンマイ動物園内

チェンマイ大学の西側に位置するチェンマイ動物園は広さが約1km²あって熱帯降雨林をうまく利用して作られている。位置はチェンマイ大学の隣だが内部の環境がまったく違う。大学の方は人工的環境だが、動物園内は自然そのものである。だから蝶も自然の熱帯降雨林で採集できるものである。個体数は少ないが、谷川ぞいで採集する蝶とは異なったものが採れる。

(3) ワイヤウの滝 (Nam Tok Whuay Keaw)

ワイヤウの滝はチェンマイ市から最も近い好採集地である。市からサムロで15分も行けばよい。チェンマイ大学の裏手がワイヤウの滝で、サムロで片道30パーツ(150円)である。ここはチェンマイの市民のいこいの場となっており、神戸で言えば布引の滝に比する便利さがある。川すじの両側に歩道があり、そこここに蝶の好採集地がある。2時間から3時間頑張れば、20種程度の蝶を集めることができる。ここは蝶の個体数ははなはだ多く、絶好の採集地である。タテハ蝶に属するものが多い。森林は熱帯降雨林の二次林である。

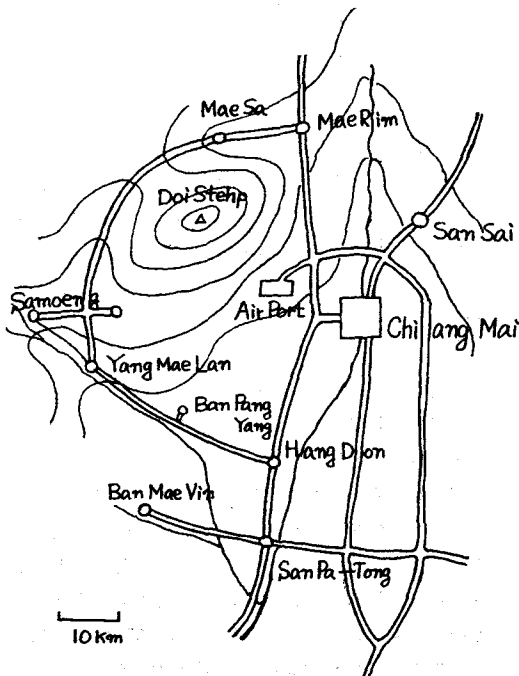
(4) ドイ・ステップ山 (Doi Suthep)

標高約1080mのドイ・ステップ山は市内から見える唯一の山で、いかにも大陸の山らしく、どっしりかまえた感じがある。旅行書にはチェンマイは山に囲まれた谷間の街との説明があるが、市内からはドイ・ステップ山以外には見るができない。やはりここは大陸である。この山頂にはWat Phrathat Doi Suthepというクエナ王によって1383年に建てられた有名なお寺がある。市内からワット・ドイ・ステップまで行くにはミニバスで往復150パーツ(750円)である。ミニバスをチャーターして40分ほどでお寺参りの駐車場に着く。蝶の採集にはお寺の方に行かず、駐車場に車を待たせておいて、川ぞいに自動車道に行く。この自動車道はよく舗装された

立派な道である。蝶を採りながらゆっくり自動車道を登っていく。道の両側は立派な熱帯降雨林である。30分も歩くと国立公園の入口に着く。この入口付近がとてもよい蝶の採集地である。タテハチョウ、シロチョウに属するものが多い。さらに行くくと薬樹園になる。このあたりも採集によい。さらに国立公園内は特に採集禁止になっていないので、タイの昆虫学者によれば、国立公園に入れば多くの蝶が採集できるとのことである。

(5) マエサ象訓練場 (Mae Sa Elephant training Camp)

チェンマイから、チェンダオ、ファンそしてビルマ国境の町メイスイへと続く高速道路、国道107号線を市内から北へ30kmほど行き、西へ折れてサムエン方面に通じる山道を10kmほど行くとマエサ象訓練場に着く。ミニバスで往復350パーツである。駐車場はないから道路に車を止めて待たせておく。ここにはレストランもなにもない。訓練場に入るには1人40パーツの入場料を取られる。ここには多くの象がいて、象が見物できるとともに、象の背に乗って山奥へ入ることができる。蝶の採集はこの象が行進する道で行く。ここではドイ・ステップやワイヤウの滝とはまた違った珍種を得ることができる。蝶の個体数はさして多くはないが、採る蝶、採る蝶みな種類が違うといった趣があり、特にフタオチョウの仲間や、セセリチョウ、アゲハチョウが多い。珍種は特に高いところを飛ぶので、さおの短いネットを持って行くとどこから手がでるほどの珍種が採れず残念な思いにかられる。それからここではものすごく速いスピードで飛ぶ蝶が多



チェンマイ近郊の地図

いので、捕らえにくいですが、採集できればかなりの珍種のはずである。森林は二次林である。

(6) バン・パン・ヤン村 (Ban Pan Yang)

実は地図の上で見当をつけてヤン・マエ・ランに行くことを考えて車をチャーターした。ハン・ドンを西に折れて仮舗装の道を行ったのだが、行けども行けども目的の村には到着しない。運転手が途中で出会った農民に、どれくらいあるかと聞くと、まだ30km以上先だというので、300バーツで約束した値段ではとても行けないと言い出すものだから、このあたりで適当な所で止めてくれと言って車を降りた小村がバン・パン・ヤンである。森は切られていて雑木林が茂り、採集地としてはあまり気が進まなかったが、村より奥に行ってみると蝶は実に豊富で、シロチョウ、タテハチョウ、ジミチョウが多く、特にシロチョウの類はものすごく速く飛ぶので採集が困難だった。珍種4種を含めて17種を採集した。

6. 注意すべきこと

チェンマイでその他注意すべきこと、守るべきことは

次のとおりである。

(1) 街を歩いていると見知らぬ男が寄ってきて、良い女を紹介するが来ないかとか、マッサージはどうか、若いきれいな女性ばかりだとか言い寄ってくる。絶対にこの手の客引きの口車に乗らないこと。チェンマイの日本人の失敗の90%は女で失敗している。揚句の果ては大金をまき上げられて、日本へ帰れなくなり、領事館に泣きつくことになった日本人男性は数多いという話である。怪しげなバーにも入らぬこと。日本人の中には、チェンマイは男にとっては楽園で、いくらでも女が手に入るといったことを言う人もいるが、チェンマイの大多数の女性はまじめに働き、夜は男と一緒に出歩くなどということは決してない。

(2) チェンマイの水道水は直接飲めない。現地の人達も決して飲まない。水道水を飲む場合は一度煮沸してから飲むこと。ホテルが部屋に持って来てくれる冷水は清潔である。もちろん、山の谷川の水も飲むことはできない。だから水筒か魔法ビンを日本から持って行くといよい。

姫路市大手前通りのラッパイチョウ

阿蘇達郎*

本年度の第3学年の春の学年行事は、4月28日シロトピア博の見学であった。集合場所を姫路城三の丸広場にしたため、私はJR姫路駅から大手前通りの東側歩道を、銀杏並木を眺めながらお城へと歩いた。メゾン・タナカヤの前（彫刻“想い”の南）のイチョウの第一の枝の南西の枝先にラッパ状の葉を見つけた。

7月6日、第二次生物学会台湾研修旅行のためのパスポートを受け取りに姫路へ行った。用件は短時間ですんだので、再度大手前通りのイチョウすべてを観察して歩いた。その結果、ラッパイチョウ7本を確認することができた。

〔西側歩道〕 駅からお城に向けて

- 東急観光 レストランしらすぎの前（駅に最も近い樹）
幹 高さ1.65mの所の南側
- 大手前交差点 北西の角 幹 高さ2.5mの所の南西側

- 姫路ドッグセンターの前 幹 高さ2mの所の東側
- 寿司 万福の前 幹 第二の枝の付け根の北側
〔東側歩道〕 駅からお城に向けて
- 姫路信用金庫駅前支店の前（駅から3番目の樹）
彫刻“舞降りた愛の神話”の南 幹 高さ3mの所の西側
- メゾン・タナカヤの前 第一の枝 南西の枝先及び北東の枝先
- ヤマトヤシキの前（一番駅寄りの木） 幹 高さ2mの所の北側
昭和59年、私が加古川市新神野で発見した8本のラッパイチョウは、以後毎年所々にラッパ状の葉をつけている。恐らく大手前通りのラッパイチョウも、毎年木のどこかにつけるであろう。
ちなみに、新神野のラッパイチョウの枝先をさし木したものは4年目を迎えるが、いまだにラッパ状の葉をつけない。

* 県立加古川西高等学校